
エドゥアール・ヴューヤールによるイプセン作『棟梁ソルネス』のためのプログラム挿絵について

エドゥアール・ヴューヤール（1868-1940）はヘンリック・イプセンの愛読者であった。1890年代、パリの劇団「制作座」にてイプセン劇が次々に上演されるにあたり、ヴューヤールは劇場で配布されるプログラムのための石版画挿絵を多く手がけた。プログラム挿絵に関する先行研究はもとより少なく、実際の舞台における視覚的効果との類比が漠然と指摘されることはあっても、詳細な個別研究はほとんど行われていない。本発表では、イプセン作『棟梁ソルネス』（1894年4月上演）のための挿絵を対象に、「塔」のモチーフに注目しつつ造形を分析することで、挿絵の場面選択や表現意図の解説を試みる。

『棟梁ソルネス』は、建築師ハルヴァル・ソルネスの人生に、「大建造物の建設による神への挑戦」というバベルの塔の物語に遡りうる古典的テーマを織り込んだ悲劇である。教会を暗示し、ソルネスの創造欲を刺激してやまない崇高な建築物である塔は、戯曲において象徴的な意味合いを担うが、これがヴューヤールの挿絵のテーマである。

挿絵には、庭に臨むベランダでソルネスが——自らの命取りとなるのを知らずに——新居に付く塔の完成祝いにその天辺まで登ろうと決意する場面（戯曲第三幕）が描かれる。薄暗い森のなか、塔の一部が円形の光に包まれて姿を現し、下方でソルネスがそれに見入るこの構図は、幻視体験を表象する造形語法に則っている。すなわち幻視者の前に、顕現するものを画面上方の片隅に浮遊するかのごとく描き出す、レンブラントの《ファウスト博士》を想起させるような構図である。しかしながら塔は実在し、幻影ではない。つまりヴューヤールは、幻視の構図を採用することで現実の塔を異化し、このモチーフが劇中で示す象徴的性格と実在の両義をひとつのイメージの中に共存させているのだ。

さらに、この両義性はモノクローム表現によって強化されている。薄暗い舞台照明の翻案として解釈されてきた本作の明暗表現は、木炭を思わせるマチエールと併せて、むしろオディロン・ルドンの「黒」と呼ばれる木炭画および単色石版画と結びつけられる。ルドンは1894年8月の『ラール・モデルヌ』誌に寄せた文章で、木炭が彼の「不可視」なものの探求を助けたと語っているが、その審美的態度はヴューヤールの石版画にも通じている。またヴューヤールやその周辺の画家たちがルドンに敬意を表し、彼らのなかにルドンを「幻視者」として見る向きがあったことも示唆的である。

このようにヴューヤールは、戯曲中の劇的な場面ではなく、塔が最もその象徴性を発揮する場面を選択し、ソルネスが神への挑戦を決意する、いわば創造欲という不可視の力が湧き上がる内面的なクライマックスを描き出した。本発表では、劇評を中心とした同時代の言説から、こうしたイプセン劇の「読み」が、ヴューヤールをとりまく文化環境においても共有されていたことを裏づける。